

1 活動名 つたえあおう ききあおう

2 活動について

子どもたちとは、本活動を「つたえる」と呼んで行っている。この「つたえる」は、ベンチや牛乳パック椅子を丸く並べて座り、生活の中で見つけたことや感じたこと、興味をもったことなどを語り合い、聴き合う活動である。この活動を充実したものにするために、大切なことが二つある。

一つは、子どもたちが何でも話して大丈夫だと感じ、聞き手としても分からないことを何でも質問することができることである。子どもたちが「間違っているかも知れない」と思いながら、発表したり質問したりすることがないようにすることが重要である。また、発表は順番などを決めず、子どもが発表したいと思うタイミングでやってよいことにすることも大事である。

もう一つは、聴き手を育てることである。これは、単なる姿勢の良さではない。どんなに背筋を伸ばしていても、聞いているとは限らない。大事なことは、話し手の伝えたいことを受けとめようという姿勢を育てていくことである。そのために、発表後に質問の時間を設け、分からないことやもっと知りたいことを質問するようにしている。質問を通して、話し手が「これも話しておけば良かったんだ」ということを知り、「ここも伝えないと分からないんだ」という聴き手との距離感を知ることになる。聴き手として、質問の仕方を知ると同時に、話し手としての伝え方を知ることにもつながるのである。

加えて、聴き手を育てる手立てとして大きなものに「ふりかえり」がある。現在のクラスでは、1回の発表で、1人5分の持ち時間で6人の発表を行っている。その全員が終わった後、一人ひとりの発表や質問でどのような話だったかをふり返り、話し合っている。このように、聴き手が主体となる場を多く設けることも、聴くことの大切さを伝える手立てになるのではないかと考えている。

また、子どもたちが「ここにいて良いのだ」と感じ、安心・安全にクラスで過ごせることも大切なことである。よい話し手・聴き手を育てることは、この安心・安全にもつながることだと考えている。そのために、教師がどうあるべきだろうか。私は、子どもたち同士のことばや行動が、他者の安心感を奪うものである時には、しっかりと伝えていくことを心がけている。教師が「待つ」ことも大切な手立てである。教師が入らずとも、時間が経てば解決することも少なくない。質問の仕方、もっと知りたいという原動力で、訊き方を工夫するようになるし、話し方を工夫するようになる。そうした子どもの活動をしっかり見守り、意味づけられることが大事である。私自身もそれを磨いていきたいと考えている。

この「つたえる」を生かして、この活動の後、そこでの発表から子どもたちが良いと思うものを1つ選び、それを子どもたちと文に表す活動を行っている。「自分が話したことが文になる」ことは、子どもたちにとって書き表すことの大きな動機づけとなっている。

3 学習指導計画（帯単元 3学期14時間／20時間） ※毎時間のおおよその流れ

- サークル対話で、1人5分程度、6人の発表を行う（5分に質問や感想の交流も含む）。
- サークル対話で出された話題について、振り返る。
- サークル対話の話題で、良かったと思うものを1つ選ぶ（子どもは複数投票できる）。
- （時間が残った場合は）選んだ発表を板書し、共同推敲する（できあがった文章はノートに視写する）。

4 本時の学習について

(1) 本時のねらい

- 聴き手を意識して発表する。発表する子の伝えたいことを分かろうとしながら聴き共同推敲に生かす。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 サークル対話で発表を聴きあう	○教師も子どもも発表を楽しむ。 ・話し手の伝えたいことに寄り添いながら聴き、応答できるよう配慮する。 ・子どものことばが、とがったものにならないよう気を配る。 ・必要に応じて、語義の共有や場面を想像するための支援をする。
2 発表を振り返る	○発表内容を1つずつ振り返り、内容を思い出す。
3 発表から題材を1つ選ぶ	○子どもたちが気に入ったものを複数投票しながら、題材を選ぶ。
4 選ばれた題材を共同推敲する	○発表者の表したいことに寄り添うことを大切にして推敲する。 ○推敲するポイントを整理しながら進める。

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

サークル対話で、子どもたちが聴くことを大切にしながら、主体的に活動しているか。